

静岡県知事賞

小さな親切一回目

掛川市立第一小学校 三年

鈴木ふう香



三年生になったばかりのころ、妹たちと電車にのって、浜松に遊びに行った時のことです。となりのあい野えきから、一人のおじさんがのって来ました。おじさんは、白いつえをついていました。せきがあいているのに、うんでんせきの近くの手すりを持って立っています。かた手でつえを持って、もう一方の手で手すりを持っているので、電車がゆれるたびに、おじさんはゆらゆらゆれました。わたしは、白いつえを持った人が目のふ自由な人だと言うことは、前から知っていました。でも、こ

んなに近くで見たことははじめてです。電車がゆれるたびに、おじさんがころばないかと、心配で心配でたまりませんでした。わたしが、おじさんの方ばかり気にしているのを見て、となりにすわっているおかあさんが、

「せきがあいているのがきつと分らないのね。そこ、あいてますよって、おしえてあげたら。」

と言いました。けれどもわたしは、なかなかその一言が言い出せませんでした。言いたい気持ちはいっぱいなのに、なんだか

ドキドキして声にならないのです。そのうち、二えきもすぎてしまいました。おかあさんが、

「早く言ってあげないと、おじさん、おりちゃうかもしれないよ。」

と言いました。おじさんは、あいかわらず電車がゆれるたびに、ゆらゆらゆれています。

思い切って、わたしは立ち上がりました。うん動会の八〇m走でスタートする時のように、心ぞうがドックンドックンと、急に大きくなりました。おじさんのように、ゆらゆらゆれながら近づいて言いました。

「あのう、あのう、ここのせきあいてます。」

おじさんは、わたしの方に体をむけ、ちよつとこしをまげて、

「ありがとう。おしえてくれてありがとう。」

と言いながら、せきにすわりました。そして、わたしの顔を見て、

「何才？」

と聞きました。わたしが、

「八才です。」

と言うと、おじさんはおどろいたような声で、

「そんなにちっちゃいのに、わざわざおしえに来てくれて本当にありがとうね。」

と言いました。

浜松に着いて、おじさんもいっしょに電車からおりました。エレベーターの中でも、よこにいるわたしに、何ども、何ども、「ありがとうね。」

と言ってくれました。ドキドキしたけれど、思い切っておじさんに言っ、あんなによろこんでもらえて、すごくうれしかったです。その日一日中、わたしの心はポカポカしていました。この次からは、自分からすすんで、わたしにできる親切をいっぱいしていききたいです。



静岡県知事賞

魔法

富士宮市立富士宮第一中学校 三年

佐々木 日菜



今年の夏はとても暑かったけれど、その中でもとりわけ暑いある午後、私は図書館へ本を返しに行かなくてはなりません。自転車で走っていても、風が熱く感じられました。赤信号で止まると、頭から太陽が照りつけてとけそうだし、足元からは、熱いアスファルトの熱がムウッと上がってきます。あまりに暑いので、少しバックして木陰に入って信号が変わるのを待ちました。

ふと道路の向こう側を見ると、おばあさんが一人、ギラギラ

の太陽の下でじいっと信号待ちをしていました。周りに日差しをさえぎるようなものではありません。私は、

（おばあさん暑いだろうな。大丈夫かな。もし、倒れたらどうしよう。助けに行こうか。でも反対側だし……。）

と、なんだか不安になってきました。

するとそこへ、小さな女の子を連れてベビーカーを押しながら、女の人がやって来ました。おばあさんの横で止まると、自分の差していた日傘を、そっとおばあさんの上にも差しかけて、

一緒に入りました。私は、

(よかった。助かった。)

と思いました。しばらくして信号が青に変わり、おばあさんは頭を下げてお礼を言ってから、道路を渡りはじめました。

そして、親子が歩き出した姿を見た私は思わず、

「えっ、うそ。」

と、言ってしまいました。なんと、その親子は別の方向に歩き出したのです。とてもびっくりしました。私は、当然同じ方向に道を渡るものとばかり思っていたのです。小さな感動が、私の中でじわじわと広がっていきました。そして、私はただの目撃者で自分が何かしたわけではないのに、うれしい気持ちで心がいっぱいになりました。おばあさんとすれちがう時、

(よかったね、おばあさん。)

と心の中でつぶやきました。

私は、これを誰かに伝えたくて、話したくてたまりませんでした。あのおばあさんも、きつと家に帰ってから家族に話したと思います。家に帰って来てから、すぐに母に昼間の出来事を話しました。

「すごいねえ、いいところに出会ったね。」

と、びっくりしながらも、感心していました。私たちは、あの女の人は、おばあさんが自分のおばあさんの様に思えたのでは

ないか、と話しました。

別々の方向から歩いて来て、交差点で出会って、また各々の方向へ歩き出す。そのほんのちよつとの間、あの交差点に魔法がかかったような気がしました。そつと差し出された傘は、魔法の杖だったのかもしれない。皆の心にさわやかな感動を与え、親切の種をまいたのかもしれない。素敵な場面に出会うことが出来て良かったです。あの時の気持ちは忘れられません。私もいつかどこかで、と思います。

